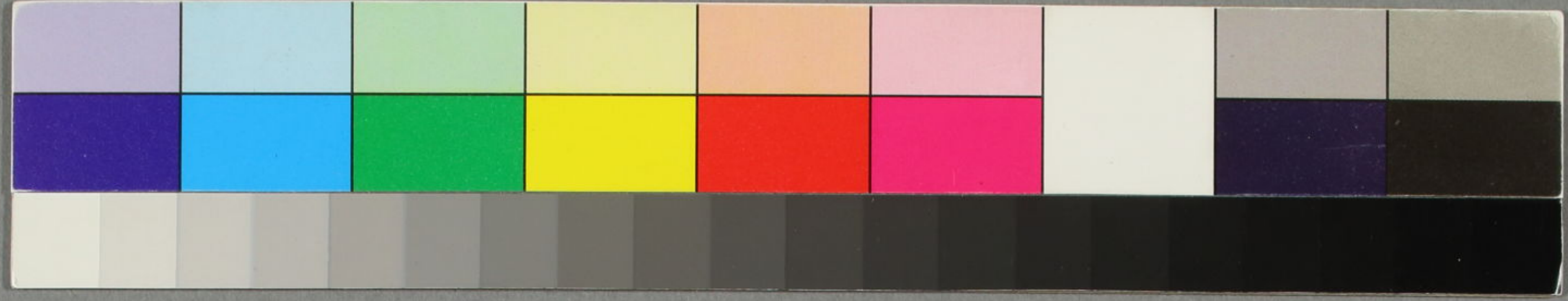


遊  
色  
徒  
全

特別  
~13  
4372







史  
4372

遊色箱徒目錄

嘆分抄

傾城比女の遠い

三辰抄

舞男の俊村秀々  
々々格式

松口傳

傾城茶寮

玉常本

大臣とやぶ

口鬼灯

回文のあ

不断の心

起請の分

袂浪

大臣の智恵

封の印

道世の伝

結昆布

川舟女房の本





福耳

天藏女帝の本

赤学子

赤学子の文

根生草

大正の金草

山株の白

傾城の内花

車集

陽春のふん

只生

南風集の

野郎情

安入

安入の

花集

花集の

本集

本集の本

松が下

年々老翁の本

素服

野郎の

思仕

野郎の本

附入

野郎の本

おのり

野郎の本

茶臼

おのり

江戸の

おのり

おのりの

おのり

おのりの

おのり

おのりの



又換の盃

お名取の口傳

蓋をさす物

おやまの床に足  
切後傳と云

松玄葉

おやまの極密

天毛猪ぐ

あひくよあはしけ  
田呂女

きりの糸

こまくもの  
まちり

ぬきまき

目録終

諸遊效子廉子

○ 吟分



概傾城と地女と云ふもの  
なれど傾城ハ男とかもどは  
が上りしと云ふ人なれは思  
男やとも云ふが何れに  
てまのかり男はと云ふ  
らと云ふは思ふに思ふ  
是のこが思ふて下る  
らと云ふは思ふに思ふ  
のらと云ふは思ふに思ふ







そつて男の股をさしてさして  
おろしむきまのいさひをい  
ておつよわておきまゆいさめ  
のちりもあはしくなりて男れ  
かりて衣履をさゆきさかじ  
らつらやう足<sup>わ</sup>のわけさげちく  
一日ふたいたれどされども比女  
も床の坊者もあがり下<sup>た</sup>をわ  
せおつのわづまひくあつまり

○三修佛<sup>えんげん</sup>

釋とらふまゝいりけり物をとらる  
男の傾城よらうのなれどは  
さご一口してとれたる事<sup>は</sup>釋の

男とさしきまらつてめう<sup>めう</sup>女帝の  
のをらつてやん次をさす<sup>は</sup>極釋<sup>ごくしやく</sup>なり  
ゆきまごころく<sup>く</sup>指<sup>さ</sup>りまきん<sup>まきん</sup>の浪<sup>なみ</sup>  
とつひなまき<sup>まき</sup>わさぶと馬<sup>うま</sup>の野<sup>の</sup>  
音<sup>ね</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>事<sup>は</sup>と<sup>と</sup>鼻<sup>はな</sup>に<sup>に</sup>け  
る<sup>る</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>傾<sup>かたむ</sup>  
城<sup>しろ</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>若<sup>わ</sup>成<sup>じやう</sup>き<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>は  
た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>盲<sup>めう</sup>蛇<sup>だ</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>す  
と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>せ<sup>せ</sup>め<sup>め</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>釋<sup>しやく</sup>  
お<sup>お</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>あ  
は<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>け<sup>け</sup>お<sup>お</sup>  
され<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>あ  
ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>釋<sup>しやく</sup>お<sup>お</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>  
は<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>



つひ乃女とてとどしめりけりもの  
かりぞねよまぢんぬぐこのつこ  
いぢりのかしこたがしるゆい  
人のうわとわたあがこい男の  
かよとてよかやとくちのづう  
女帝かこふかりますあり

▲梅もやうこぞかりあまんと人よ  
しうたかばけしをあにぶあふ  
こしりて人のさきとゆす  
女女帝を打こまもとす釋と  
てトおの釋こ世とてくしと  
と智恵のこくしと人といふ  
こ中乃釋といふハ▲  
楊屋とびとく同じ女帝ハ賢者

▲ちりひんこのこを愛(出)るものよ  
あらず▲賢いこまくのまね内ふ  
いふとくたがふあくとと女帝と  
借ぬ物と▲あびりやせくと  
楊屋とゆいといひ女帝とらこ  
ふやとてせぬもの▲  
て女帝より男がさるるとさ  
まて起る時と女帝よりあ  
小座よおぬものなり▲ワあふ  
女帝乃かありとゆい金そてえ  
乃女帝のかざりつとぬもの  
なりとてつらとてぬもの  
その女帝ふことよりあふ  
つあつとつあつ時一なる



うぬをしまつりませぬとらうく  
 二夜とらうのうふいよぬとのく  
 ▲二夜の女島のふれ女島ゆ  
 せぬ物と▲あむらののわ女島の  
 方へあやうぬぬをやらうとあま  
 ぬあうあうとらうがわ女島を  
 とらう物と▲身をあうとゆふ  
 ぬるうとぬとのく▲女島ゆ  
 日そのゆねと女島人あうのせだ  
 よ楊屋へ用うのあうあうとあゆ  
 まうとらうとあまをすむゆふ  
 ▲女島あやうの金銀がまうよふ  
 まのあり▲楊屋がまうと女島  
 をう人ねとぬぬとのく▲あうあ

とら女島のあうとらうとせぬ  
 ▲女島のあまよとらうあうとら  
 とぬとのあうあうあうあうと  
 うとらあまあうあうあうと  
 のくあうあうあうあうと  
 ぬと初あうあうあうあうと  
 ねふあうあうあうあうと  
 うあうあうあうあうあうと  
 うあうあうあうあうあうと  
 物あうあうあうあうあうと  
 ねとらうあうあうあうあうと  
 初あうあうあうあうあうと  
 うあうあうあうあうあうと































のひすいこしんをれどごが  
 をとていぬぐふ能は御男と  
 とひいさふてぬのうけのま  
 んがうらうらうのいごまも  
 かの事まかんゆして床で  
 いんせきせきずいざん一  
 のうぬきぬびのうらうら  
 とかたことわり又女を  
 がふふ床のうらうらと  
 男がうらうらとぬのうけ  
 ぬのうけうらうらとぬの  
 様とやうらうらとぬの  
 そこのうらうらとぬの  
 ぬのうけうらうらとぬの

一系とらうらうらとぬの  
 ぬのうけうらうらとぬの  
 樽されど女命の祓ゆふ  
 つけがうらうらとぬの  
 のうらうらとぬの  
 一系とらうらうらとぬの  
 んのうらうらとぬの  
 おたまのうらうらとぬの  
 うらうらとぬの  
 おかうらうらとぬの  
 とぬのうらうらとぬの  
 素帯本とぬのうらうらと  
 何種がぬのうらうらと  
 一系とらうらうらとぬの















引張の自合してとて就て  
 のゆいこげがまらなりと  
 かげ揚をう揚をくかよゆ  
 たりりかおるまよいきりれま  
 してわくと其日の人どんへ  
 つける文親のみの中なる  
 うしけそらうしくとてわ  
 るまづきもあかからこま  
 といぬぎののりましくい  
 せぬといふおれ。梅子。こ  
 口とすい合のち。うぬぬ  
 鬼灯とておのされそて  
 一物ありまをたふふてとつ  
 きとてうして口とすい合

とよハ揚屋の存後のつが  
 うしてらまとあかたそと  
 ぶみのけして交するまを  
 ともそくんで隣子。こま  
 とのこいふもまをんへ  
 とてうあひこ小あてい  
 かなでうしてまのまけと  
 いふてまわくまのまを  
 てのりこまをいかな  
 とゆいしむのいぬま  
 ずまおらまをいし  
 ちるおらしてまのま  
 ぬいふあひしてはくか  
 史がたんをやくま



いふこと自らがうかりやがるといふ  
と申すこのよわうすぢだ男といふ  
又ハ舞のたどんのあつてはこゝねね  
物かやねるたどんよすぢいふん  
の自白とまゝいふせしきげんよ入  
よりいひやねうのおひげを  
よらしてまゐりてはるこはすぢに  
まがこつすれはつぎまのたどん  
のぢり物に其時の女帝さびうら  
われども茶室をうらむいふま  
天志うくいふわ人や一年と楊を  
のうこゝあつて田舎のたどんを  
へり合はるとつとこあもははる  
うゆいけゆるふハ親方あはれと

女帝中のうんよあふ半くうあ  
本志うぬんもつあぢなれど  
家小あすはなるすぢれし女帝  
の年々今一年つと年々は  
親こもえゆらすも白人を  
け親こも茶室のていめたの  
うらうけいせぬうら女帝もぢり  
とこそく月ふ又日つ日ハせい貴  
ねてあすねたまふあすすふ  
まづのいああああああああ  
あまとしてあああああああ女  
帝さねくふわくやとすま  
うくねくああああああああ  
するものいあああああああ



わろゆへおま更志のくのるまて  
うくねのらゆわくくも男小  
かこかすすまのかり

○不取の心

傾城の起信日記の事いふ  
まづいせめしむまのうらかこ  
す取く楊枝つゝく鼻泥り  
んでいぬりまぐとがぐくと  
書の日十日や昨日をわん元日  
うう元日まてあぬ取信とい  
先とやいらん又いせのかまぬり  
い書すまそかんそのゆま  
つけいぬらんわと月十日

ちがうであつていごとあつたら  
いといらわうとまのこがん  
ゆいぬといのすあくの女鳥を  
書ぬ物くだんもしくはす  
ていのがまぬまのく方昨日泥  
よあつらわりの女鳥とすて  
ちとくれぬまびいぬのこ

○封乃印

傾城よまふのらゆくよの二美とこ  
されくらまがまの封とけく  
かの日其まらはいふぬやと封と  
つらまきじういしりうあ  
らこりまらむらたんのそふ







しねがらわらうの浪の波のひ  
とつたるはよほほとんを  
ちけあらしむせけん玉ねん  
ちうらわらうの浪をらうら  
揚屋へさうしけすもめし  
あらしむののやちちち  
女帝のこえとらう浪のり  
がらうとこらうもの女帝の浪  
しらあらしむとん揚屋う礼  
いあらしむの浪をらう揚  
屋こそとん浪をらうと  
ら女帝の浪をらう浪と下  
さゆら女帝の浪をらうのついで  
よらぬみしたつらした

それませいとぬのひものなり  
いすのいさうとらうこみぬの天  
んがが刺りり小玉浪がらう  
ようらうとらう貴目と二色本  
まてたまへをらうけつとたま  
ぬの神よ入らう海へま  
かお其をらうと一包おをら  
あらば時たま面目なうとら  
いあらしむとんや思つんとさ  
まら乳わらうとらうあらし  
これまら時たまとらうとら  
粹されとたまとらうとら  
糸糸の代浪けらうのた  
屋つとらうとらうとらう



てわらへぬやうにのびるか  
ふもまふれどさう張とせん  
でもの思ひはとてすし  
もがあらその今一匹は  
をさへいふあらんごう  
かこやとおまぬいふ  
一匹はとてお出さる  
をさへいふのもおん  
てがまひてふごう  
そふやとてさるも  
まのまのよとて  
お出さるごうとて  
た張らん思はぬ  
をられる張る

○ 繕ヒラび昆布

川舟の女舟又ハを敷女舟  
男がしからまふふ  
まを定めて一巻と  
づこがかりし  
とりたる  
を敷ぬ舟ハ



ままればかりつとめしと同  
 りあききく梅橋のさうりの  
 うら本所（本所）の花がどかんと人  
 のかきふ船（船）よりさうな船（船）  
 と味縁にうきびきくふさ  
 きふ本まらしとてむとびさ  
 乃夏うもさきくは一巻のす  
 のこ思ひ寝（寝）よする事、うかめ  
 わんごともやと身とがくらめ  
 らおろしとすすぬいとくあき  
 ろの京大坂しそ人のまここの  
 子しゆをまふ志もここのひの  
 ちどんち肥（肥）後のさういふま  
 てがぬのめいぶつとむさすな

かあられくろとちまうまけり  
 そふ森悦しくよびわくた  
 くとそもこごととつらくの  
 ぢみう人のまこれととどんち  
 つあせいしうしうまうくと（取）  
 りふかうせしうたが本（本）の  
 くとびふふまはやくぬいも  
 ながさんがれねすこととどん  
 つゆやきわがく作（作）せん（せん）ふ後  
 ちとてま（ま）ふあててもこの  
 しく（ま）さうしうりちとぬぬ  
 せあつとどんちふふ後との  
 ら（れ）ゆよのちゆとさうへ  
 又とらわぬりからお茶の内



のさくしぐしを寝かへてま  
 ふわぐずと身なだいら  
 俊よこりあひさりぢまふ家の  
 よぶりこあきつてあたまや  
 ぬのけかたむね性ちが本の目  
 とくろこ中しそてさつこ  
 んさわつむねわつこのよの  
 これはくちもあつぬせんじ  
 うすまとおぼへせんさじ  
 びこのがされやうわらぶ  
 鼻いきのわらふお親とつ  
 てぶとすびことふらさ  
 とそそしてあつとさ  
 つれふねふねまてらさ

もまくりもあつぬ  
 ぢゆとふそのわつこ  
 まゆりちよあわりと  
 つくもあつとわらぶ  
 けさぢまふ家のこ  
 へすあわぐずと  
 ふらふちつとかな  
 ぬもはいろい  
 ふがふらものとか  
 ととやあわき  
 のつらさ  
 こつとあつて  
 ぶつとのか  
 ぢまふ



とむらりしそむそしゆあま  
うのつひやうまどんもつ  
がくじしそむじらふらふ  
てこらんちりば女帝をうり  
ももたぐすだのこめ帝の  
身のゆへに世ふねしむ

○福耳

さうそ大志うくの女帝つよを  
なくしてふがらと思ふそ大  
ぞんちのつとまよとせし  
ときじがきいふぬ世をう  
の女帝もけつがやう麻呂  
むしそしたこのとのいふ

グーそむむいかなしとむら  
うのまがたまきかりな  
の田とそまのどし野のまこ  
ぬとらうこむしむしむし  
てむむむむむむむむむむ  
ふしむむむむむむむむむ  
のうらむむむむむむむむ  
てむのむむむむむむむむ  
むむむむむむむむむむむ  
むむむむむむむむむむむ  
こむとむむむむむむむむ  
むむむむのむむむむむむ  
むむむむむむむむむむむ  
むむむむむむむむむむむ



とらうりもふんやせむらひ  
 ありまもあはれいりゆい  
 すまもまふくすれい  
 又さうりもふんやせむらひ  
 ぬ物もあはれいりゆい  
 方ばかりあはれいりゆい  
 もあはれいりゆい  
 るをくもあはれいりゆい  
 床ひらりもあはれいりゆい  
 とさびきもあはれいりゆい  
 よがるもあはれいりゆい  
 つりたの女の表はよあはれ  
 とふらど母のまへに  
 んで上氣してあはれいり  
 きいせかきあはれいり  
 れうりいりあはれいり

○ 秋その老

神のまへに  
 らして  
 出あつて  
 きあはれ  
 秋のぬ  
 雲の  
 らあはれ  
 くす  
 るあはれ







どんがらうごらんとらうあま  
 女鳥のをらりきる小神が。  
 金のみあが物とらんきまらば  
 こあつても金とらんわうす  
 して女鳥ののめされ女鳥が  
 小神がうららあめれだま  
 あつてあが小神をいあくを  
 より実づらびきあまを  
 あり終つぬものごとあれど  
 ちありそのとらあて存せ  
 ぬ男のちとらういあしをじ  
 実ふひらのぬらありまの  
 のこがほらうそをまあわい  
 けいほらめとのごが人後え

ちまよあひあひてあめれ方  
 へまの曝<sup>ひら</sup>十<sup>と</sup>冬<sup>ふゆ</sup>はまらこ十  
 して送りあまありばたん  
 とくあすのそらぬんらら  
 かわもとまづんそて金と  
 送るたんいざうらああり  
 とずのづん女鳥のまこらま  
 らあもつてい曝<sup>ひら</sup>やまらこ  
 八<sup>や</sup>あがりそとらう物と又  
 ついぎきうぬ<sup>ぬ</sup>にがわのびの  
 しいはげがわののあやら  
 たんのがんその時の送<sup>ゆ</sup>たの  
 まんをこしらあてすい  
 やうそたんいあひら



くずはらふしこ小ねふ  
ねやまよきまらすたり  
かあすまいあし

○山神の白ひ

とせも女馬乃身れんは  
のこさず猪りこあふれたか  
れつめ女とらげいんぐんせま  
事あつらわらぶがりのす  
いふはあじの事されんま  
なす親この世なれはあせま  
てらぐがいつらゆり物よあす  
それゆふ自あの小神とつら  
おいづまの故とたすも仲り

とせ小神のつらつら  
のあゆづら小神をま  
あねゆいあしこつら  
ぬこあげ念のらよや  
たす事あつら  
取れも同じ事あや  
女馬いたとれとやま  
又そものつらつら  
とあつらつら  
あんのあつらつら  
みらつらつら  
みらつらつら  
てはつらつら  
びのあつらつら



わね女席のさしづめく教と  
 へちぐんつくとすすをわらうに  
 ろりらつがひ女席をわらうも  
 わしよまをさくのさしづめくわ  
 ららいつてやうさうさうのうひ  
 ぬさしよまをさくのさしづめくわ  
 しぬれどもあつてさうさうさ  
 高いがぬさうさうさうさうさ  
 ぬいつてがわりせあつてのさ  
 んぬんとさやんとげさうさ  
 とさうさうと茶と女席のつけ  
 ずありそれいさすのさうさ  
 色どいんまは山神のさうさ  
 ひのすら耐女席がぬさうさ  
 たくわさうさうさうさうさ  
 ちるるの極端でこさうさ  
 のさうさうとさうさうさ  
 づづのさうさうのさうさ  
 さうさう女席のさうさ  
 すまのこの男はさうさ  
 らびげぬらうさうさ  
 てさうさうさうさ  
 してさうさうさ  
 ぬさうさうさ  
 よぬさうさ  
 が女席のさうさ  
 ぬさうさ  
 てさうさ  
 ぬ其女席のさう



色後人よきものりも速御存  
と申すもぬれぬのめじすめでは  
たしよ常ら親がらやのあふ  
とこり候のまじりてません  
やまらうらられぬあふりて女房  
がせいのんじりてらりて候  
まがらうららり候ひてよく  
よ思ひていせ我ゆへ年を留  
て金とていしてたれんといふ  
ぬもちんちんものちんちん  
のりつらつらぬぬぬぬぬぬ  
と梅よふんすおらのあつら  
ゆへいりて女房があらう  
とあすゆめぞいぬて女房が

ふとりのめでつひ出んせん  
ことらどのごも具足なてら  
うしやんてうよごんて異毛  
のびごんすわくしてつひから  
まらわくとのごのあつらり  
くくぬれんさかんすげん女  
房よらうららぬぬぬぬぬぬ  
のまらつらつらぬぬぬぬぬ

○ 車 箋

板橋屋のまじりてわらわら  
すはたのりつらつらぬぬぬぬ  
のつらつらぬぬぬぬぬぬぬ  
まよはたぬぬぬぬぬぬぬぬ















ちとくほのへもきんたふれ  
 はなしらうのぬまのうら  
 のまこりもくがまじく  
 とやまのむらめくはら  
 つまのむらめくはら  
 くはらめくはら  
 せうらめくはら  
 てはらめくはら  
 うはらめくはら  
 こはらめくはら  
 とはらめくはら  
 まはらめくはら  
 あはらめくはら  
 へはらめくはら

ぬかまらまのぬま  
 ら女帝よよとら  
 ちまよけくのも  
 とれたをさげ  
 楊屋のよめと  
 やらめくはら  
 うけまらめく  
 ちじん款がりの  
 おののまらめ  
 下まらめくは  
 してはらめく  
 りの丸めくは  
 くらまらめく  
 四はらめくは







ゆきつりつりおぼろもろもろ  
 とびとれくたんお身とせら  
 んんつりいぼとせそのらう  
 しちじまふかりてめんらうり  
 身入敷とせやうつらふとや  
 るおんらふゆりくおみえわて  
 ぐんたんやりうけら時町あれど  
 とく身とらうらうとせら  
 うらうらうらうとせら  
 めんたんわたりよとせら  
 つらうらうとせら  
 とせがらぬいかりおつら  
 るとせら

三百敷敷のゆづり路り  
 とらぬの人よわづあま  
 月のそびくお清ら  
 まげ百敷とあま  
 うまおらげまお  
 おうららぬ其のら  
 敷子のおはら  
 るおふと  
 かお  
 一年又百敷  
 うそやび  
 つらうら  
 わあづら



りがかりらぬまうとをせし  
 されむは法師後らうらよ  
 其ふかりと野鳥の身は  
 とあつとあつと友古のうら  
 幸付らわいと二夜あつと  
 又ふあつとまうあつと  
 さぬくまぬわ小紋と糸  
 付とちまふうむ心や二切野  
 の産わけぬおんのもんご  
 ふらとをそと海づらふけ  
 くもかたけりも色業卒の  
 洗つけはすうと命とま雅  
 教いよあつとせつと思は  
 との根た念ふおのくしめ

此之師といふららららら  
 りうかり人の付代らいた  
 おう若無意の肉とせと  
 とと興あつとて知ふ切紙  
 傳授封しめてむらりふ  
 とつとまふおらつととを  
 一

○花勝負

百物終ふ若るの仕との  
 つひとまゆらとさ事  
 かるてしむ人付池うら  
 今時のまら野鳥の  
 まらとせしがらんよ







ままんまのびんべの討ち鼻と  
 比まをわけらましくずのうん  
 中一ふおかすとあそくわ事  
 縁のびとまきあそくまき  
 さいろくびわあしに就く神く  
 へのまねは中とんぐまこの  
 ちことあらうま其かの者だ  
 一まはけいあかつかず極くド  
 めくままるとまじ事十二の  
 びま人があそくゆりまのれり  
 四あもまらう事われど家物  
 おらりまそくままままけら  
 につらけまらまびんわ  
 くらまらまらまらまらまら

大うと地丹々の出つるめ地はそ  
 のらうと地丹々の出つるめ地はそ  
 がまのうしてえごまらりや  
 つまら下れこのあそくまら  
 ちくどまらりてまらとつら  
 事ねままらまらまらまら  
 云なると同だんよのまらして  
 公のつらまらまらまらまら  
 うたなり神機下ふらまらまら  
 一もかまら神きんまつらまら  
 つらふおまらまらまらまら  
 けりほまらまらまらまら  
 ちまらららまらまらまら  
 まらまらまらまらまらまら



秘もやらせうといふ身のくまをば  
 されどもこのらむらつともめをば  
 おかしきまぶらぐんをくづり  
 て親このまゝしむがやうなま  
 とやうなまゝさうらゝまをづつと  
 わくくまのふのめとわんざりて  
 らやぐのまおぶやうらふおと  
 わしてがぬやうじむをあり  
 さまがならひのふらとせま  
 らめしむらぐんさうらゝま  
 おゆゑとしむくともわんをば  
 念のまづけとうらゝまの  
 小神とてまづけてわんめさ  
 へどらりさうらゝまを酒についで

のまれまゝをさうらゝまのふら  
 がらあてらわらまゝしむら  
 念若ぬともまゝありあて  
 ちやとせんらゝまの四ふら  
 らめとのらまゝさうらゝま  
 つとぬとのちり、後まゝあやゆ  
 時色同格さうらゝまをづの  
 人の所をわんをふらむら  
 らめくじむあてまゝしむ  
 まゝまゝまゝまゝさうらゝま  
 つぐんをたつけてまゝまゝ  
 てこまゝまゝまゝまゝまゝ  
 をまたりされども後まゝまゝ  
 らんらゝまさうらゝまを











まけるふ回念ふん評ぬ思念  
思ひこぐんあまやめく野郎  
とりてわきび昼夜若後乃  
やんせくとわくまひげいふ物  
やあまよとまがふ盛なりり  
は時かきりあう回念は師と  
らこぬが撫と野郎のやとい  
やしくなりさうよく愛つる衣  
のまんとい親こより木根指  
とさそとくさめくふうのまの  
とりとすむるとまもく  
まふちりれたるふ野郎のま  
さしふおづつとさまをなわ  
といふは根指よりおづつり

○ 枕巻

野郎とを撫とえさうあぬ  
物なるともやとこのいん  
収色Pさけくさるけり  
かち肉じらさる世のまらぬ  
の奴のわん結しりあ糸妓







おぼしむ所と申すをうんふんふんて  
ざんめつりくまのぢくせり  
かまりさやうせんのかうせつふ  
さふいあふふふとわさなと  
きんよつがゆふくまへ入まの  
けとめさうあくもぢくせり  
の介々しくさむひちりあう  
たさぶさのますは金とぢく  
けとめさういんいんあもつ  
ぶらめつめくあわんがほく  
ぢくあふさやののんらうせん  
らくよ性念とらうまはゆふ  
はらういんあまらぬ板屋  
入とまあ井とさやうふつと

○素股

西席ちぬら申あゆ一野席  
の一候かまひまねかわせのう  
まふ思せんの座とこのまふ  
おせぬがもゆくさかりとまふ  
縁々りさふゆまむ女席とら  
がひ野席よさやのさう合と  
くらまのさうまふとあの人  
じんのは根とさむらういぬま







○ 思壯

食わてくよらこびわのやどを  
 中の玉村者休とてことし  
 思人たる揚枝一本依後風を  
 おつらうとて一代樂しくつら  
 後の小刺とともくつら十二年  
 以系まのどとて野郎と勝とて  
 了れんくつらゆを家とりと  
 しおつらうとて夜を夜の花代  
 とて南よめく一歩式氣浪  
 をのぶくががらんせの夜を  
 えん送らんとんはまねるりや  
 とてんはまねるり野郎と勝と

ちわくくならくかおわたり  
 留みとてつらうがわど  
 けけ念とわくこやとていふ  
 してを不あらうとてつら  
 しく野郎のこやく小中がな  
 くくもたなれ賣あまのなを  
 つかうとてつらうとていふ  
 も系あくも野郎の玉とて  
 思りたる時とてさとわ  
 年の中へつらうとていふ  
 由さうかき玉とてこのつら  
 とやめとせとていふ今とていふ  
 小つらうとていふれとわ  
 私とていふこととていふ



神よつとめーがも肉も  
 くのもつらわけしかりませ  
 んおい本よ女と寝ころこや  
 くわりととも鼻息わく女  
 すりのあしよかりあつて  
 とらつての野鳥とはつめ  
 うすもつとく玉ぶさのいり  
 つうくうのさやのがまらぬ  
 きとわりつたぬうと我おご  
 やうがさめつたんとと我と  
 ととめつらとよの氣味  
 のほふびあうけがよもい  
 女とよがうそのたも若し  
 いらわおわらくとも

じつとつとつとつとつと  
 けわとてしよーもよいきんと  
 つたんだんらうらびあふぞ鼻毛  
 ちれあしけろぞんとぬう  
 時らがつてりやうとぬとや  
 ちらうら又らぬあつとちなり  
 ーとされども若小のくとい  
 うお自らまわれとて垢ぬが  
 はまらびがまらぬのはあつり  
 大はもあつどがわごもこと  
 ゆくむとすまんだのわらう  
 くゆもあまんとくねとめと  
 ち口をく板女中お賞つと物  
 鳥らららららららららら















んがかつりきりしをわりの入角  
まが身の代代まぐり出しく  
面<sup>めん</sup>向<sup>むか</sup>どうしぬきを燃<sup>も</sup>す  
換<sup>か</sup>心<sup>こ</sup>とせうもまごんまわり  
と今ら者ぞう

○わけさし

昔<sup>むかし</sup>約<sup>やく</sup>松<sup>しょう</sup>骨<sup>ぼね</sup>をどつひ一え  
こつこつ張<sup>は</sup>まぬぼつとせざる  
つひはつこつとせざるあざむ  
の一<sup>いち</sup>礼<sup>らい</sup>長<sup>ちやう</sup>はよ<sup>よ</sup>ありあわと  
大<sup>おほ</sup>らういせつふ其<sup>その</sup>後<sup>のち</sup>鴻<sup>こう</sup>長<sup>ちやう</sup>井<sup>い</sup>  
十<sup>じゅう</sup>松<sup>しょう</sup>又<sup>また</sup>なごつ日の出<sup>ひの出</sup>るまきだ  
の野<sup>の</sup>郎<sup>らう</sup>づるふだりらだせんふ

判<sup>はん</sup>の嚙<sup>か</sup>めてて今<sup>いま</sup>時<sup>とき</sup>のえんごう  
小<sup>せう</sup>臥<sup>ふ</sup>角<sup>かく</sup>なごつとせるとまの  
こつこつからぬつまごつとせると  
うしあふまがゆもつれどな  
がさ林<sup>はやし</sup>の夜<sup>よ</sup>とまよ夜<sup>よ</sup>とせると  
よびさもおつらるせつとまご  
急<sup>いそ</sup>のさいらふふまのそつ成  
こつこつとせると小<sup>せう</sup>あまふま  
つらふらつとせるとかつとふ  
まごつらつとせると様<sup>よう</sup>推<sup>い</sup>中<sup>ちゆう</sup>  
つらえんごつがりひやう今<sup>いま</sup>時<sup>とき</sup>の  
まごつとせるとあててまの  
こつとせるとのまごつとせ  
ごつとせるとかつとせると











思ふ程ふハ忠よびのすのらね  
 一かたいたつドもそらんつてす  
 けさよせにされども起くのら  
 色又ふらうしかりなまことの興  
 けふ人々鼻涙も男のてに  
 へふめらも心懸すそそかう

○ ねさくし

白田下とあざみ

京大坂の白どんハ越せんこと  
 りぐんか色かんとそらりや  
 一京の金をあつ換へ大坂  
 のせぬいふめしてもトあ  
 わらうこらうと十三里と下  
 してら何と何とさうさうさう

ところへ京も上とさうさう  
 小町乃さう一財今ハ建仁寺  
 町ぞんざりりけむあつ町  
 下ハ自分ぞさうさもわり又  
 親こそがりをわり益分なれ  
 ぬのこもてをさぐの宗らさ  
 とむねり菱ハちさうさう  
 けさびさそそりさふ入  
 けりやうりさのと愛おあさく  
 大坂ハ八橋筋新中きよ下  
 念してぞさうさ目んをそ  
 つやうと茶屋へらぶさよ  
 おさうり所いさことぬら  
 まんといつとも印ハよさ大



坂よ其う人松原坂と云う切よ  
 して白人の名とて平ゆきり  
 ちうとしらをこふふらり  
 て新橋北一うぶてをど何  
 物もゆきうぶてがさあのか  
 まうこののいかんうとがさうの  
 のついなとさうあこもきなり  
 大坂ら白人のあゆめゆき  
 は床入すまもてがうら  
 らんゆきそあつのそらうら  
 さと紙とぬうさうくさの神  
 おまう人さのまねうら  
 の之紙ゆきそらうら  
 ゆきとほらららうして

かつわさうらふ祢さ  
 せんかき帯とさうらう  
 もらうゆきくとあつとわ  
 てがさうら傾城とらうら  
 やさうら床の同とあつと  
 さうらさうらうが腰のう  
 すいさんせとびらうら  
 さうらうらうとつらうら  
 せとさうらうらうら  
 うらうらうらうら  
 てお梅のさうらうら  
 付い所持の紙のやうら  
 葉きうらうらうら  
 かんうらうらうら



我ふなれとわらふてなが  
 らふふまづがらんきさしわを  
 よいさふさふかつくわくこと  
 づがはらう中つあまかり  
 てあらうりしとたさあせう  
 とつらんと天舟のうしとよ  
 世こたうくがんとまがんと  
 すられたるはれとむちとわ  
 しとれしとまよしとむちと  
 まりのやうなとく時だんく  
 だつしとくしとくしとくし  
 つあしとくしとくしとくし  
 はあてむらんのあしとくし  
 りとくしとくしとくしとくし

便よゆとそまことらふ内表  
 子ぬまづけとくままらふや  
 笑むらふ二ことくええんで  
 さいせると村よつて身の人  
 の算用なるしとくまらふ  
 わくどくまらふとくまらふ  
 て森入にばあてしとくまら  
 へしとくまらふとくまらふ  
 まのわしぬまらふとくまら  
 そと身ふさくむらうりや  
 らく又えかからふとくまら  
 子目がまらふとくまらふ  
 とくまらふとくまらふとく  
 トも口びびびとくまらふ



とらふは園ざりねいともたかひ  
くしあのみ事ひはさしとらざり  
男のさこころで録つたといふ  
さりのいさしはあ女のさうしざ  
うしげまんとはあわくま金がかこ  
あくざら白ん二美せりの志  
まあしあさる根がどのにと先  
すあしあしよあつてもすを物  
あしてねつしとちうとびさや  
らうとさうとさうみどろそと玉  
つとびとさうい田がころままき  
たときぞを入らるふあもさうす  
わあうしあさき女らやとさう  
とあしよあわさそとあさすいお

あしとさくら其あわと人ままた  
者ましがゆこそと人まことま  
ねやうよまよやうとままといね  
ぐいよあびよあびてゆといけら  
がまあしあおわつりてびびやぶ  
白んのかよあさけと目とわさ  
あつはめつと根のさうさう志  
られらあまざりあといさそと  
たさこめあんやとあひがま  
りよりとあぐのねとあめい  
づらまやとあひいんらんしりひ  
ゆさよあまものやがんとえんか  
むつまんでとさうとらつとさ  
やいあしとあしあさそと根







上茶屋よあつめく遊撃なる  
うまひゆりしむいじりあがみ  
とそお身としんと野わりの  
とそとてんていかなふんぞて男  
つらふとて早より田のまじり  
のちりりものも向ふむがむけく  
はや〜むいぢり〜俊老の法も  
浪でぶらりかびじりものあど  
や、標とちこやうしてゑふ、男  
つあうつて茶屋おあつてとて  
〜標〜のあつ〜つとあつて  
つあうつてとよびぢり〜の  
温純なるぬごもつちびわら  
が利休がこの角笑いあうつ

それと茶よ野のあつて遊撃  
うけものお〜ぬいぢりあがみ  
ハアそれゆゑ探幽のまじり  
のり進上アヤふとものいこ  
たつてあつて人よ一南つて  
きうあて月の内お〜あつて  
アツのやとアヤふとものいこ  
〜とらぶんあつてまじりあが  
あふらんぢらせらんととと  
い〜つあつて茶屋の女房と  
とどめと〜てぢりあがみ  
くのあつて〜あつて  
〜があつて〜あつてのら  
け標とちりあつて〜



付、松の舞のつらみぞ中二  
 階、何れをさしつかせむといふ  
 ばかり、其はまゝにんばさ  
 く、松さしつかせむといふの  
 けう、下、まゝにんばさ  
 こゝま、まゝにんばさ、  
 わるど、いれれども、いれれども  
 さ、singo、の、まゝにんばさ  
 け、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 一、舞、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 と、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 び、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 一、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 ま、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ

び、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 と、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 わ、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 い、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 く、草履、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 や、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 あ、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 せ、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 の、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 ど、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 お、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 あ、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 も、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ  
 そ、まゝにんばさ、の、まゝにんばさ























や一板かやゆいたのよとみへ  
しと後ておまゝらりて  
おがらやくお身よせこら  
らいせとちりておらさ  
のす内おがらやくのす  
かりてあふもるこ又お  
まぬおらやくはぶか  
見ねと床があがぬく  
たのさげんわしじ  
おかりてさげんわし  
同してしおは  
あでらわねたさ  
るよやうそ  
のが山ハ床りず

しつゆゆおら  
かふや  
つら  
いてつ  
うやん  
おん  
お門  
おね  
お  
つ  
く  
あ  
あ



のまじきふかふかしたるなほ  
 又よが身もまじふ物にてしう  
 やしあせおぼしよのたまふ  
 よおぼしきひきひきしう  
 てごごんと大きおあそん  
 股でしうんでしうとけあま  
 しめあからむむきふあ  
 身くまあつとせぶおぼし  
 がりしとさみ紙よのべは  
 皮被よつたははととま

○枕ことば 茶屋通詞

おやぬらふおやのらぶと  
 わりもいふあせれを年より男

おわお耐はるい男はる乳を  
 とことしおれよあつた  
 男よは父年よりハはぐま  
 ちうり美男いふつけとせぬ  
 ふうせとせむりてふんせ  
 よい男志まんてせらう  
 つあつもわりふさうたの  
 合くまらりかめ耐がま  
 のらとせがふをんせとら  
 わらうのまゆくのじりう  
 せしつと又わらうはせ  
 らのらゆくのらまをら  
 けららくと表裏とつら  
 帯のなほいこね男との







よりのいぬゆいせしすくそ  
がすましがいすし所が所  
出うけうこ本けのうききと  
とくしめ共はせしすこお  
常ふこりてことけり  
とやとけししう時八鹿こぬ  
り安政お町のうもあぬ  
あよしけ海かりりうのん  
とふもあつしくまうちあび  
すしとけしとあつとあひ  
紀書ふく海の年五かあ  
物發へるりふ事のうら  
てじとびめらうどく物ら  
りららららららららら

ゆりともそびさうはぎん  
ハタしてPまのせて飲  
あまのすは格とてとあ  
ととてせうくやわの  
ちりりなげうまけ家  
う所大坂の徳を所三人  
のぬを船のりごらう  
るが下垂ゆん格う  
系のあらやとあ  
る感ものとのら  
ゆと大坂のあらや  
半おし名のふ  
天とくの格式と  
あうでハ四せん



まどぐの暮月ふゆく世くわ  
 て二月の十五日ねんご酒さけ盤ばん舎しゃ中ちゆうを  
 のつぎ二日ふたひの切賣きりばい形かたち茶ちやの  
 垢あかかきかきとかくかきのちが  
 いかりがかき茶ちやをゆめうと  
 世のらんらんややすすいいままううままえ  
 ーーのりや

まねあふ

終



